9年間を通して社会を創る力を育む

～子どもの学びのストーリーと共に～

PROFILE

福井大学教育学部附属義務教育学校 (前期課程 研究主任・川﨑耕介)

本校は、2017年4月、旧福井大学教育学部附属小学校と附属中学校が合併し開校した附属義務教育学校です。本校では、全教科・領域で9年間かけて取り組む協働探究学習を行っています。また、2018年より文部科学省より研究開発校の指定を受け、新領域「社会創生プロジェクト」の研究を進めています。子どもたちは各教科の学びと社会創生プロジェクトの学びを往還しながら、「自立・協働・貢献」に関する資質・能力を培い、予測不能な未来社会を生き抜くための「社会を創る力」を身に付けています。(公式HP http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/)

1 社会創生プロジェクトの誕生

先行きが不透明で将来の予測が困難な21世紀社会の発展のためには、多様な価値を能動的に理解し、様々な人々と合意形成を図りながら共に生き抜くべく、自律的に学ぶ力をもった児童・生徒の育成が急務となっています。

そこで、我々は一貫した理念をもつ9年間の教育課程を通して、よりよく生き、社会の一形成者として他者と協働しながら、社会に提言し、かつ社会に貢献しようとする資質・能力を備えた子どもたちを育成するため、新領域「社会創生プロジェクト」を設定しました。

そして、社会創生プロジェクトの問題解決のサイクルの中で培われる社会を創る力を「自律」、「協働」、「貢献」(福大附属版キー・コンピテンシー)と設定し、それらに関する資質・能力が9年間の長期的なスパンで子どもたちにどう培われていくかについて研究することとしました。

2 社会創生プロジェクトの概要

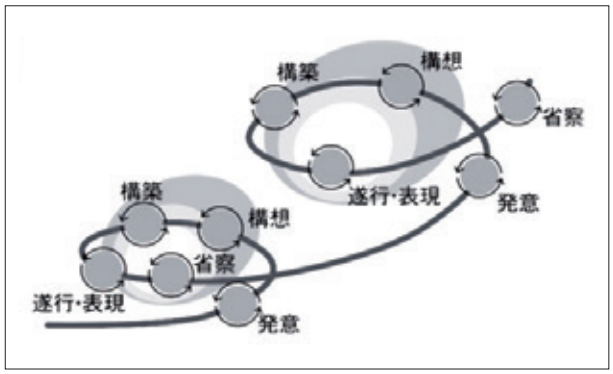
社会創生プロジェクトでは、子どもたちが自らプロジェクトを設定し、そのプロジェクトに向けて仲間と共に協働探究を行い、プロジェクトを達成していくような学びを展開していきます。

社会創生プロジェクトの協働探究において、自身との対話(省察)、他者との対話・表現(コミュニケーション)、は欠かせません。そのため、社会創生プロジェクトは国語科の「話す・聞く」「書く」2領域と総合的な学習の時間及び生活科の該当単元を編み込んだ新領域とすることにしました。

つまり、国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」で育成する資質・能力を、社会創生プロジェクトにおける子どもの学びの文脈で言語活動を通して育成していくことになります。例えば、国語の学習でいきなりポスターを作ろうという「書く」学びを行う流れではなく、子どもたちが進めるプロジェクトの中でポスターを書きたいという子どもの学びの文脈上で「書く力」を培っていくことになります。また、このように、主体的に学習に

取り組むことで、本来必要であった時数よりも少ない時数で学習を進めることができると考えています。社会創生プロジェクトに国語を編み込むことで、総授業時数の削減も目指しています。

3 ロングスパンでの協働探究スパイラル



協働探究スパイラルの様子

新たなプロジェクトへの思いや願いが生まれる段階を発意、プロジェクトに対してこうするとよいのではないかと考えを巡らせる段階が構想、その考えを形にしていく段階を構築、そして実行していくのが遂行・表現の段階としています。そして、最後に活動を省察し、次なるプロジェクトへの展望を描く段階を省察としています。

この図の通り、次なるプロジェクトは子どもの資質・能力面、プロジェクトの内容面で学びの繰り上がりが起こります。そのため、実践が繰り上がりのないただの活動に終わらぬよう、教師は子どもと学びを進めながらも、子どもの1歩2歩前で実践のデザインをし続けます。

実践事例【第6学年】

5年生　：「福井をよりよくしたい」
　　○福井のことをよく知ろう

6年生①：「福井の未来づくりに参画しよう」
　　○様々な人たちとつながろう

6年生②：「2年間で学んだことをフリーペーパーで表現し、福井の魅力を発信しよう」

4 子どもの学びの価値付け

子どもに培われる福大附属版キー・コンピテンシーの9年間における変容を見取るため、担当していない学年の実践を全職員で長期にわたり見合いました。そして、教師同士で実践を基に子どもたちのよかった姿、これから到達してほしい姿を語り合いました。その結果、福大附属版キー・コンピテンシーに関するルーブリック表を作成することができました。

この表は、教師が子どもの価値付けする時にも使われますが、何よりも子どもによる省察の指標になります。評価の主体は子どもだからです。そして、教師と子どもで語り合い、指標は改訂され続け、その時の子どもに合った生きた指標となっていく性格をはらんでいます。

では、子どもや教師はどのように学びを評価していくのでしょうか。プロジェクト中にためた感想や資料などのポートフォリオを基に教師と子ども、子どもと子どもが語り合ったり、学びのストーリーとして実践を書き綴ったりしながら行われます。つまり、自分の成長具合を俯瞰し、省察していきます。そして更に、ラウンドテーブルという場で他者へ語ったり、他者からの価値付けをしてもらったりすることで子ども自身が省察を深め、教師は子どものとらえを深めていきます。

しかし、このような評価方法ですと、教師の主観が評価の全容に大きく影響を与えます。そのため、教師が評価しうる省察的協働探究コミュニティとなり得ないといけません。だから、教師は実践を見合い、子どもを見取る腕を磨き、子どもの成長を全校で語り合い、教師集団が社会創生プロジェクトを評価しうるコミュニティへと成長し続けないといけないでしょう。その事を忘れず、日々我々は社会創生プロジェクトの研究を続けていきます。